

ペルガモンのアスクレピエイオン（1）

—— その歴史と聖域遺跡を中心に ——

山 川 廣 司

は じ め に

筆者は、愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」共同研究に「古代ギリシアの巡礼」を課題に参加している。2004年にギリシア本土エピダウロスに展開した医神アスクレピオスの治療祭儀について報告し、巡礼活動の1つとしてアスクレピオス崇拝を採り上げ、古代ギリシア人の心性について考察した¹⁾。

多神教の世界であった古代ギリシアでは、一般的に信仰には寛大で、彼らが求めるものは父祖伝来の仕来りに則って宗教儀礼を実践し、持てる最高のものを捧げることで神々への敬意を示し、それにより神々から恩寵を受けるという現世利益を期待するものであった。その崇拝儀礼は病氣治癒を求めるエピダウロスや神託で神の裁可を求めるデルフォイなど多様で、かつ居住地周辺の地域神崇拝から四大民族祭典のようなポリスの枠を越える大規模な宗教儀礼など様々で、特に著名な聖域には、平素はポリス毎に分立していたギリシア人が、各地で行われた宗教儀礼に参加するために巡礼を行った。

キリスト教のように、来世での救済が人々を巡礼に誘う目的の1つであるが、古代ギリシアの巡礼においてはそのような観念は見られず、神と人間の間では相互授受の精神に則った崇拝が行われ、ひたすら現世における利益が追求された。このように巡礼者（嘆願者）は現世利益を求めて持てる最高のものを神に捧げて祈り、願いが成就した暁には出来うる限りのお礼を献納した。エピ

ダウロスでも病気治癒の感謝の碑文や治癒の部位型の奉納品、お礼の献納板などが多数出土している。

エピダウロス巡礼は、巡礼者にとって病気の治癒とそのお礼詣という人々の生活に密着した宗教儀礼である一方、聖域での滞在は、非日常的経験による心身のリフレッシュを図ることができる貴重な機会でもあった。それは病いを抱えた巡礼者（平癒嘆願者）が、聖域での最初の夜に、アバトン（abatón、お籠り室）での夢見でアスクレピオスの診断告知を受け、翌朝神官団（医師団）Asclepiadaiにそれを告げることで患者の治療法が決められ、トロス（円形建造物）などの機関で治療が進められた。また患者はギムナジウムやパラエストラ、スタディオンでスポーツを、公衆浴場や図書館、野外劇場で余暇を楽しみ、外科的治療に加え、自らの内に秘めている治癒力を高めて心身の回復を図ったことなどを筆者は指摘した。

2007年にトルコ、アナトリア西海岸にあるベルガモン（ベルガマ）遺跡を訪れる機会があった。アナトリア西海岸イオニア地域は古来ギリシア人による植民都市が多数創設され、またアケメネス朝ペルシア、ローマ帝国の支配、さらにはビザンツ帝国、ササン朝ペルシア、オスマントルコと諸国家の興亡に翻弄された地でもある。本論文は、ギリシア本土エピダウロスから分祠された古代ベルガモン王国のアスクレピエイオンAsclepieion（アスクレピオスの聖域）に展開した巡礼についての考察を目的としているが、本稿では、当地でのアスクレピオス崇拜の歴史および1960年代に発掘された聖域建物群の配置とその機能について検討したい。

1. ペルガモンのアスクレピエイオンの歴史概観

古代世界におけるアスクレピオスの主要な聖域として、エピダウロス、コス、ベルガモン（以上がアスクレピオスの3大聖地）、アテナイ、ローマなどが挙げられる。小アジア西海岸ミュシアMysia地方の都市ベルガモンの聖域は、ギリシア内外から病気を抱えた巡礼者だけではなく、AD 2世紀のギリシアの

旅行家・地理学者で、『ギリシア案内記』の著者であるパウサニ阿斯Pausanias（AD c.115～180）や著作家アエリウス・アリストイデスAelius Aristides（AD117～189）など多くの人々を引きつけた。また医学の祖と呼ばれるペルガモン出身のガレノスGalenos（AD c.129～199）は、スミュルナやコリント、アレクサンドリアで医学を学んだ後、故郷に戻って実際に医術に従事し、後にはローマ皇帝たちの治療にも当たるなど活躍し、ペルガモンは国際的に名声を博したアスクレピオスの聖域の1つとなった。

ペルガモンのアスクレピエイオンは、標高335mの丘の上に築かれたアクロポリスとカイコス川（現ベルガマ川）を隔てた対岸、西に1kmほどの丘に築かれた。パウサニ阿斯²⁾の聖地由来によれば、ペルガモンの青年でアリスタイクモスAristaichmosの子アルキアスAlchiasがピンダソス山一帯で狩りの途中に落馬して捻挫し、エピダウロスで治癒した後、神官団（医師団）から聖なる治療法を授かり、そこで分祠を願い出て故郷にこの神を勧請し、350年BC頃に聖域が設立されたとされるが、馬場恵二氏³⁾は、ここでのアスクレピオス祭祀の由来がエピダウロスであること、その勧請が国家によるものではなく、一個人の私的な勧請であったことを指摘し、さらにパウサニアスの記述（Paus. V.13.3）から、ペルガモンには先行の地元の半神テレフォスTelephos祭祀がすでに存在しており、そこへ新参アスクピオスが登場して「癒しの神」の役割と地位を乗っ取った結果、古参テレフォスの祭祀は副次的地位に落ちたと推測し、その時期を前3世紀後半のアッタロス1世Attalos Iの治世（在位241～197年BC）の時とし、その実態を具体的に伝える前2世紀の碑文（Sokolowski, *LSAM* 13=*Syll*³. 1007）を援用して、経過を説明する。それは4世紀BCの勧請以来長期間にわたって目立たない私的祭祀に留まっていたアスクピオス祭祀が国家的祭祀に昇格した3世紀BC後半以降の慣行が2世紀BCに改めて成文化され、ペルガモン国法の「追加法」に編入されたもので、この決議が国家的祭祀への昇格に際して採られた伝統尊重の措置であり、アスクレピオス並びにアスクレピオス神殿に合祀の神々の神官職は未来永劫、アルキアスの子アスクレピアデスとその子々孫々勧請者一門の世襲とし、その保障としてポリスはアゴラ

の「ゼウス・ソーテルの祭壇」において誓いを立て、政府高官Timouchiaもポリスの議決するいかなる条項も遵守する旨を誓約し、この決議を3本の石碑に記載させ、1本はペルガモン所在のアスクレピオスの聖所、もう1本はアクロポリスのアテナ女神の聖所、3本目はミュティレネ所在のアスクレピオスの聖所に建立されたことを紹介している。かくしてペルガモンは小アジアで最大のアスクレピオスの聖域に発展していった。

この遺跡は、1950～60年代にドイツの考古学者たちによって発掘され、現在の遺跡が復元されたが、最も早い建造物は5世紀BC末に建設されたとされる⁴⁾。その後ローマ期にかけて、旧建物の取り壊しと新建物の建築が継続的に繰り返された結果、建物跡の幾つもの層が見られる。アレクサンドロス大王亡き後、小アジアを後継したリュシマコスLysimachosの死後、ペルガモン総監フィレタイロスPhiletairos (283-263BC) が始祖となったペルガモン王国は、エウメネス1世Eumenes I (263-241BC) がプトレマイオス朝の支援でセレウコス朝を破り、アッタロス朝ペルガモン王国として独立を果たした。第2代国王アッタロス1世 (241-197BC) がマケドニアと領土問題で対立したことから、ローマとの友好関係を重視する政策を採ることで発展し、王国繁栄の基礎を築いた。その子エウメネス2世Eumenes II (197-159BC) も先王の政策を継承してローマとの友好関係を維持しながらセレウコス朝と対抗して小アジアの大部分を獲得し、領土を拡大した。その後アッタロス2世Attalos II (159-138BC)、アッタロス3世Attalos III (138-133BC) と続くが、アッタロス3世は自らの王国をローマに遺贈すると遺言したことで併合され、133年BCにペルガモンはローマの属州アジアProvincia Asiaの首都となり、以後ローマのアシア属州の中心都市の1つとしてエフェソスEphesusと並んで繁栄し、小アジアでのアスクレピオス信仰の中心となった。AD 2世紀にアスクレピエイオンは最盛期を迎え、現在みられる遺構の多くが、ハドリアヌスHadrianus帝 (在位117～138年) やアントニウス・ピウスAntoninus Pius帝 (在位138～161年) などの皇帝たちや地方の有力者の支援を得てこの時期に建造され、図2に見られるような建造物群を整えた聖域として繁栄した。

しかしAD253～60年頃に発生した地震によってペルガモンの聖域が破壊され、神殿は再建されることはなく、その遺跡は略奪された。AD313年にキリスト教を公認したコンスタティヌスConstantinus帝（在位306～337年）の勅令によって各地のアスクレピエイオンは徹底的に破壊され⁵⁾、さらにAD392年にテオドシウスTheodosius帝（在位379～395年）がキリスト教をローマ帝国の国教としたことにより、これまでのギリシア・ローマの全ての宗教崇拜は異教祭礼として禁止され、アスクレピエイオンはその役目を終えることとなった。

2. ペルガモンのアスクレピエイオン

医神アスクレピオスの派生語で、その聖域を意味するアスクレピエイオンは、アスクレピオスに捧げられた聖なる泉のそばに神殿が建てられたことに始まる。ペルガモンの聖域はヘレニズム時代にこの神殿の周りに回廊やさまざまな建造物が漸次建てられ、AD 2世紀には劇場や図書館等も加えられた。現在見られる遺構のほとんどはローマ皇帝ハドリアヌス帝とアントニウス・ピウス帝の時代のものであるが、平地に建設された上、外敵からの防衛設備も不十分だったため、繰り返し外敵による破壊や焼き討ちに遭ったが、現在までこの遺跡が残存したのは、窪地に泥が溜まって何百年間も地中に埋もれていたからであった。この聖域でもっとも古い建造物は5世紀BCのもつと確認されているが、ヘレニズム期からローマ期を通して聖域の領地を拡大させながら継続的に建設や再建が繰り返された。ここでは主にE.アクルガルEkrem Akurgal氏やA.ペトサリスーディオミデイスAlexia Petsalis-diomidis氏等⁶⁾の説明を参考にしながら、聖域が最盛期だったAD 2世紀の聖域平面図（図2）に配置されている建物群について概観したい。



(1) 聖なる道

ローマ期ペルガモンのアスクレピエイオン 図1 聖なる道の列柱:左手水屋跡(筆者撮影)

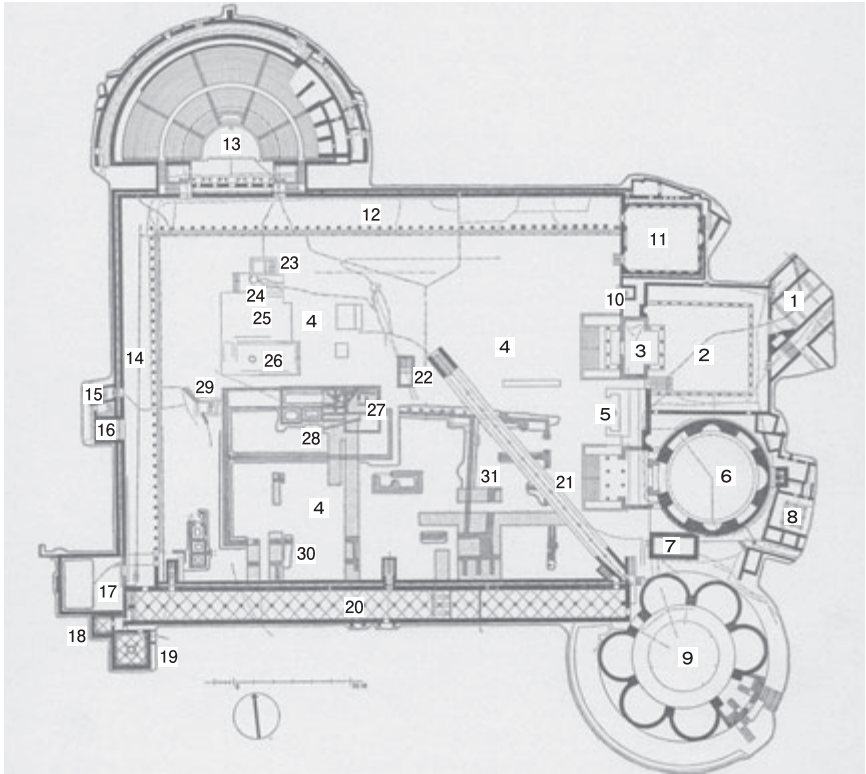


図2 ベルガモンのアスクレピエイオン平面図（出典：Petsalilis-Diomidis、p.168）

- ①入口門を備えた聖なる道 ②プロピュロンの前庭 ③プロピュロン（玄関門）④聖域構内の内庭 ⑤崇拜用ニッチ（壁龕）⑥ゼウス・アスクレピオス神殿 ⑦貯水槽 ⑧周柱式建物 ⑨治療棟（ロトンダ下層部）⑩崇拜用ニッチ ⑪皇帝の間、図書館 ⑫北側列柱廊 ⑬劇場 ⑭西側列柱廊 ⑮西側出口（ヘレニズム期の長形ホールへ）⑯西の小部屋（会議室）⑰南西の大部屋 ⑱小トイレ（女性用）⑲大トイレ（男性用）⑳南側列柱廊、地下通路 ㉑聖なる地下通路 ㉒ヘレニズム期引き井戸・貯水槽 ㉓ローマ期の浴場 ㉔ヘレニズム期の神殿、㉕ヘレニズム期の神殿 ㉖ヘレニズム期のアスクレピオス（soter）神殿 ㉗㉘お籠り室複合施設 ㉙井戸（泥浴槽？） ㉚ヘレニズム期南側列柱廊（基礎部分） ㉛ヘレニズム期東側列柱廊



図3 ペルガモンのアスクレピエイオン復元模型（出典：Petsalilis-Diomidis、p.169）

ンは、古代ペルガモンの町から全長820mの聖なる道（Via Tecta）で繋がっており、tectum（天蓋、屋根付き）の列柱道路は巡礼者を太陽の日差しと雨から保護した。これは1957～62年、E. ボーリングー Eric Boehringer氏の指揮で行われた発掘調査で発見されたものである。現在は140mだけ復元されている。イオニア様式の列柱間の中央の石畳の道幅は8.34m、列柱の外側まで含めると道幅18.14mの荘厳な道路であった。アウグストゥス帝時代に建てられ、恐らくテレフォスに捧げられたと思われる円形の埋葬記念物heroonがこの通りの南側列柱の外側に、また北側列柱内側に後の時代に造れたと思われる長方形の水屋跡が見られる。通りの中央部には石畳で塞がれた溝渠があり、巡礼者は石のすき間から響く流れる水の音を聞きながら聖域に向うという、聖域に到着する前から、すでに巡礼者のためのリラクゼーションの舞台装置が施されている。またこの通り沿いからヘレニズム期やローマ期の彫像や浮彫り等の美術品が多数発掘され、現在はベルガマ博物館に収蔵されている。

(2) プロピュロン (Propylon、玄関門)

列柱が並ぶ「聖なる道」を進んで来た巡礼者は、聖域の直前で斜め右に曲がる角度でAD120年代に再建された前庭と玄関門に辿り着く①（以下図2アスケレピエイオンの平面図番号に対応）。図4がその平面図であるが、前庭は三方をコリント様式の列柱で囲まれ、舗装がほどこされた22m²の方庭であり②、その奥には4本のコリント式柱に支えられた破風を整え、3つの戸口を持つ玄関門が建つ。それは3m以上の段差を考慮して階段で繋いでおり、このプロピュロンを通ることによって巡礼者たちに聖なる空間への入場を意識させるものであった。また正面下から見上げる破風の中心には、直径80cmの円楕が描かれ、そこには寄贈者としてクラウディウス・カラックスClaudius Charaxがプロピュロンの建造を依頼したことを簡潔に刻文している⁷⁾③。巡礼者たちは、現在は2段しか残っていない階段を登って玄関正面を通り聖域内に入った。その中庭の中心に



図4 プロピュロン平面図
(出典:Petsalilis-Diomidis, p.180)



図5 蛇の模様の祭壇の石

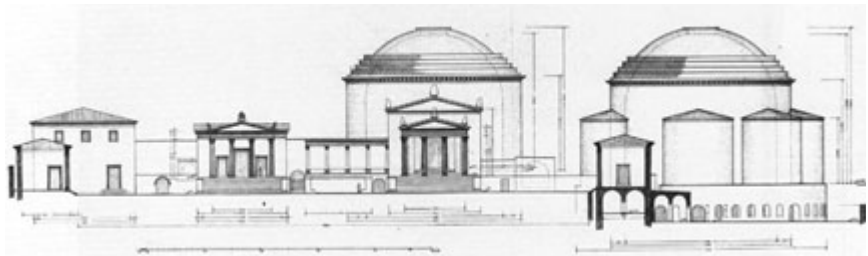


図6 アスケレピオス聖域内東側建造物群復元図 (出典:Petsalilis-Diomidis, p.184)

は医神アスケレピオスのシンボルである蛇の彫刻が施された大理石の祭壇の石がある②。

プロピュロンをぬけると列柱廊で囲まれた聖域境内で、宗教祭儀が行われた

広場と種々の建物・施設が混在していた。巡礼者たち（患者）の治療はこのアスクレピオスの聖域内で行われるのであるが、その広さは110m×130mで、北・西・南側の3方は列柱廊（ストア）で囲われ、入口の東側には図6の復元図のように、崇拜のための小壁龕⑤⑩、皇帝の間であり図書館としても使用された四角い建物⑪、半円形のドームを戴くゼウス・アスクレピオス神殿⑥、治療棟（Rotunda, Telesphoros神殿）⑨等の主要建造物が林立していた。

（3） 皇帝の間・図書館

プロピュロンに隣接して聖域の北東隅に皇帝の間あるいは図書館と呼ばれる四角い建物⑪（18.50m×16.52m）がある。北側・南側壁面には6つ、東側壁面には4つの書籍を収容した奥行き65cm、床から1.75mの高さで四角い書架が並んでおり、木製の踏み台を使用して利用することができた。入口にあたる西側には、中央に大きな使途不明の奥行きの浅い壁龕があり、北側列柱と広場側に通じる2つの扉があった。室内は書架の上の1列に並んだ薄手の黄大理石あるいはアラバスターで作られた窓ガラスを通して自然光が差し込んだとされる。また内部の装飾は、壁面は多彩色大理石で作られたエンタブレチュアで飾られ、細かい細工彫刻が施された柱頭、アーチ型や円型のアーキトレーヴ、四角や丸の幾何学パターンが描かれたカラフルに装飾された床、崇拜のための壁龕にはモザイク装飾が施され、平天井は木製の格間で飾られていたが、これは当時のローマの図書館仕様の典型的デザインであった。また入場した者が最初に目にするように、東側中央の壁龕にはハドリアヌスの彫像（図8）が置かれていた。



図7 北側列柱廊と図書館跡



図8 ハドリアヌス帝裸体彫像
（出典：Petsalis-Diomidis, p.210）

この彫像は高さ約2.8mで、きめ細かい白大理石で作られ、左肩と前腕にパルダメントウム（皇帝等が用いたマント状の外衣）が掛けられ、左手には鞆を携えた裸体像である。また右足元には戦勝記念物がおかれ、この像の台座には碑文が記され、寄贈者としてペルガモンの人フラヴィア・メリティーネFlavia Melitineの名前が刻文されている⁸⁾。現在それはペルガモン博物館で見ることができるが、裸体像はギリシア彫刻や神々の図像に見ることができるが、ここではハドリアヌス帝は鬚を生やしたギリシアの神として描かれており、台座にも「神ハドリアヌス」と刻文されており、ハドリアヌス帝のギリシア文化愛好趣味がみえる。Petsalilis-Diomidis⁹⁾は、皇帝自身が新たに修復中の聖域を訪れてこの彫像を設置したのは、彼の古代宗教伝統への関心と古い聖域を修復するに際しての彼の指針を来訪者に思い出させるためであり、この肖像で彼はギリシア人とローマ人、人間と神、博学な知者と軍事活動家の側面を描こうとしたのだと解釈し、プロピュロンを挟んで反対側に建っている円形神殿ゼウス・アスクレピオス神殿のアスクレピオス像と同等なものとして示したのだとしている。またペルガモン出土の碑文（AvP III, 2, no.365）が皇帝を新しいアスクレピオス神と呼んでいる事例から、ハドリアヌス帝とアスクレピオス神との結び付きを指摘している。ハドリアヌス帝の裸体像が図書館内正面の壁龕に安置されたのはハドリアヌス帝のペルガモンのアスクレピエイオン修復に際しての深謀な施策によるものだったようである。またこの図書館では湿気対策が施され、羊皮紙に書かれた文献を丸めた形で壁龕の小穴の中に仕舞うという他では類を見ない方法がとられており、棚には手書きの貴重な医学書などが置かれていて、主に患者が読書や休憩に利用するためのものといわれている¹⁰⁾。

(4) ゼウス・アスクレピオス神殿

AD 2世紀に行われた聖域の修復によって新たに列柱廊中庭やプロピュロン入口が創設されたことに加え、ヘレニズム時代の質素な四柱式のアスクレピオスの旧神殿（Temple of Asklepios Soter（救済者））^{②6}とは別の聖域東側に、AD142年にコンスルとなったペルガモンの人ルフィヌスL.Cuspius Pactumeius

Rufinusが寄贈者となって、ゼウスとアスクレピオスが習合した「癒しの神」ゼウス・アスクレピオスとして崇拝される神を祀る半円型ドームを戴く壮大な新神殿がAD150年に建立された⑥。図9は上空からのアスクレピエン遺跡全景であるが、治療棟と並んで円形建造物の遺構がはっきり見



図9 アスクレピエイオン全景(絵葉書より)

て取れる。この神殿の建築上の特徴は、ハドリアヌス帝によってAD118-28年に修復されたローマのパンテオン（ドームの直径43.5m）のほぼ半分（ドームの直径23.85m）の規模のレプリカで、それは皇帝ハドリアヌスや大都市ローマとの緊密な関係を求めているペルガモンの人々の意思表示と理解されうる。円形建築プランは、例えばミュケナイのトロス墓（アトレウスの宝庫）をはじめ、デルフォイのアテナ・プロナイア Athena Pronaia 神殿、エピダウロスの治療棟トロス tholos などがあるが、4本の柱に支えられた柱梁式の破風造りになっている正面前室（pronaos）がドームを戴いた円形のセラ（奥室）と繋ぎ合わせる形式はローマのパンテオンと同じである。それについても Petsalilis-Diomidi¹¹⁾ は、前室を置くことで円形建物全体を眺望することを妨げ、その神殿に近づく参詣者の視角は前面の柱梁式前室に集まることになり、その結果、円形の奥室内部に入った時の参詣者の驚嘆は弥が上にも高揚し、畏敬の念を一層強める効果を意図したものと説明している。このような四角と丸の組合せは奥室内部でも見られ、壁面に交互に半円形と四角形の壁龕（7つ）を配しており、入口の反対側の壁龕に納められていたアスクレピオス像をはじめ、癒しの神々や関連する神の像がそれぞれに安置され、床や壁は色大理石のモザイク画で飾られていた。また蒼穹・天空を象徴する上部半球上の円蓋には規則的に格間が配置され、頂点の円形穴（oculus）から差し込む日光が季節や時間で陽光が移動する天体運動を参詣者が体験し、感動する機会を提供するという素晴らしい舞台装置を備えていた。またローマのパンテオンとの関連の指摘は魅力的な示唆であり、この建物が「癒しの神」と「天空神で神々の主神」が合体した

新設のゼウス・アスクレピオスの崇拜神殿として使用されることは、普遍的、宇宙的原理の象徴としての説明を強化するものである。丹誠込めた高度な技を遺憾なく発揮しているゼウス・アスクレピオス神殿は、ローマ時代の建築スタイルを採りながら、ヘレニズム期の石造技術が引き継がれていることを証左している。

(5) 北側、西側、南側の回廊

幅93m、長さ120mの長方形の内庭をもつアスクレピエイオンは、北、西、南の三方を石柱で囲まれた周柱式回廊で縁取られ、それが聖域構内の建物の配置や空間的動態に大きく影響している。北側の回廊^⑫の建設については、ペルガモンの



図10 北側列柱廊

有力者オクタキリウス・ポリオOctacilius Pollioが関係していることが断片碑文(AvP VIII, 3, no. 64)からわかる。聖域は北側からの緩やかな傾斜面にあったため、北側列柱廊は構内より若干高く、3段ほど階段が付けられていた。イオニア様式のこの柱廊は東端は図書館に、西北側は劇場に通じていたが、Petsalilis-Diomidis¹²⁾によれば、破風玄関や装飾のないエンタブラチュアは重要なヘレニズム期の建築要素であり、ペルガモンのアスクレピエイオンの周柱式方庭のデザインはコス島のアスクレピエイオンの列柱式方庭あるいはローマのフォルムから示唆を受け、それがローマ人に受容され、発展したという。北側列柱は比較的保存状態がよく、半分ほどは修復された。AD175年の大地震で図書館側の柱10本が壊れ、後の修復でコリント様式の柱となったが、現在3本だけ修復されている。またこの屋根付きの廊下の床は患者たちが素足で歩いたり、体を横たえたりすることができるよう土間となっており、外側の壁



図11 西側列柱廊

は大理石の石板で覆われていた。

95mの長さを持つ、岩の上に建てられた西側の列柱廊もイオニア様式で、床は土間で、壁は大理石の石板が嵌められていた。1967年の発掘で、この柱廊の中央部に西に向かって出口⑮があり、階段を登るとさら104m伸びたドーリア様式の長形ホールが発見された。

この柱廊中央には小さな、南端には大きな方形の部屋が2つ⑯⑰ある。これは何に使用されたか不明であるが、宗教活動等を行う会議室・集会室ではないかと考えられている。南柱廊に曲がる所に男⑱女⑲別々にトイレがあった。男性用は一度に40人が使用でき、四角い部屋の四方に規則的に穴が明けられた大理石製の便座が囲み、その下の溝には常に水が流れていた。中央の4本の柱の上の屋根は明り取りと臭気抜きのため取り払われていた。女性部屋は17人用で、男性用に比べ簡素な作りになっていた¹³⁾。

南側の列柱廊⑳は他と異なり、2階建てとなっている。地階はヘレニズム期の建造物を移設・利用したドーリア様式の列柱で、上部は交差穹窿（cross-vault）となっており、柱を挟んで2列の通路に別れ、低い石製のベンチが壁沿いに延びていた。その中程に最も古いお籠り室が発見されていることから、AD 2世紀当時もお籠り室として使用されたと考えられている。上階には屋根付きのイオニア様式の南側列柱廊があったが、破損がひどく、復元は困難であ



図12 トイレ（奥が男子：手前が女子）



図13 南側列柱廊

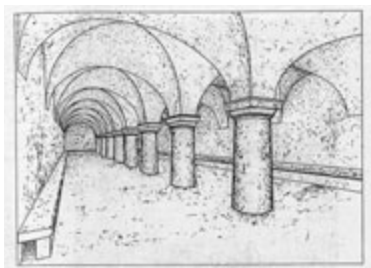


図14 南側地下列柱廊復元図
（出典：Petsalilis-Diomidis, p.190）

る。

(6) 劇 場

北側回廊の北西の傾斜地に、ローマ帝国時代にアスクレピオス神に捧げられた劇場⑬が岩の上に建設され、雨水などが溜まらないように溝が彫られていた。かつては寄贈者の名前がアーキトレヴに記されていたが、現存しない。直径71mの半円形の劇場は3,000～3,500名収容で、北側柱廊の2カ所の入口から入場した。観客席は31列以上あり、中通路を挟んで2段に分かれ計10ブロック、最上部はイオニア様式の列柱で囲まれ、座席は大理石板で化粧張りされ、座席端の肘掛けや階段部分にはグリフィンやライオンの脚の彫刻が施され、中央下段には有力者用の貴賓席が16席設けられていた。ここでは患者ら観客のために演劇や音楽会、雄弁家による演説、討論会などが開かれた。注目すべきはコリント様式の3段の列柱ファサードをもつ舞台前面（*scaenae fron*）の装飾である（図16）。そこには下段・上段で3つ、中段で4つのエディキュール（小神殿）があり、それぞれに彫像が配置されていたといわれている。またオルケストラの床や舞台下部の壁は多彩色の大理石板が敷石され、5つあった壁龕はガラスモザイクで装飾されているという、この種の劇場としては小アジアで最初の豪華・華麗な典型的ローマ劇場であった。この劇場建設にあたってハドリアヌス帝や彼の側近たちが立案だけではなく、施工にも直接関わったと推測される¹⁴。



図15 劇場

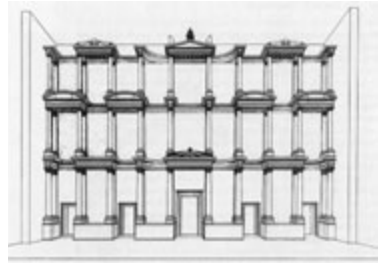


図16 劇場正面復元図

（出典：Petsalilis-Diomidis, p.193）

(7) 治療棟（ロトンド・テレスフォロス神殿）

ゼウス・アスクレピオス神殿に隣接し、南側列柱廊の東端で、聖域で最も低

い場所に丸屋根を持つ2階建ての円形建造物・治療棟（Rotunda）がある⑨（図3、図9参照）。この建物は元の建設計画にはなかったが、追加でAD200年頃に建設されたもので、増大する多くの巡礼者たち（患者）の治療を行う場所として重要な役割を果たした。ゼウス・アスクレピオス神殿同様、中心が円筒形建造物で、半球上の穹窿とその頂点に円形窓を持ち、上層部分には6個のアプス（半円形の張出し）を持っている。聖域内では大規模な建造物であったが、上部・下部の2層からなり、図18の断面図に見られるように、下層部は上層部の五分の一の高さで、低地のため構内の広場からは上階部分しか目に入らなかった。治療棟へは北西の聖域内側からの簡素な入口や聖なる泉のそばから下部建造物に続くカマボコ型地下通路⑩（図21）を通って入ることができたが、南東側には長方形のニッチ型の大きな玄関と階段があった。この聖域の反対側が正式な入口であったようである。中央の円形ホールは内側の直径が27mで、床からドームの頂までの高さとはほぼ同じであった。両側に取り付けられた半球上のアプスは幅11m、高さ8mの巨大な空間を生み出している。床や壁は大理石で装飾され、タイル張りの木製の屋根で覆われた丸天井は、花模様のモザイクで装飾されていた痕跡がある。下層部の構造を概観すれば、直径18mの中心核の部分は近づけないが、四角形や長方形の



図17 治療棟下部：弧を描く列柱

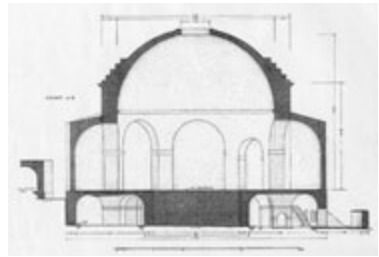


図18 治療棟断面図
（出典：Petsalilis-Diomidis、p.204）

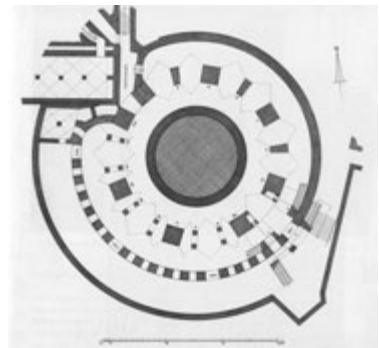


図19 治療棟下層部平面図
（出典：Petsalilis-Diomidis、p.207）

柱に支えられたアーチ天井を持つ環状のホールがそれを取り囲む。ここでは北東側と南西側では構造が異なり、北東側は土を削って造られており、自然光の僅かな光線しか届かないが、南西側はそれとは対照的に、日光浴をするための南向きのテラスに繋がる3つの扉のほか、多くの窓が取り付けられている。また下層部にも上層部同様主要な入口が2つあり、1つは「聖なる泉の貯水槽」から続くカマボコ型地下通路や構内の広場からの階段に繋がる北西側のスロープの入口であり、南東側には上層部に繋がる両側に階段を持った大きな入口がある（図9の遺跡全景写真を参照されたい）。入口近くには既存の井戸から引水してきた井戸があり、さらに多くの井戸が精巧な送水管システムを通して南西側のほとんどの柱の間に設けられ、治療の際に利用された¹⁵⁾。ここでも治療に際して巧みな水の利用が窺われる。

(8) ヘレニズム期の聖域建物群（お籠り室・旧アスクレピオス神殿）

これまでみてきたペルガモンのアスクレピエイオンは、ローマ帝政期・AD 2世紀に修復された聖域で、それ以前のヘレニズム期のアスクレピエイオンがそれより小規模だったことは、南側列柱廊跡^⑩、東側列柱廊跡^⑪から窺われる。しかしここにはアスクレピオス崇拝の聖地として構内に入った巡礼者たちが崇拝儀式等を行った宗教施設や病気の治療に利用した重要な建造物が集まっていた。

E.Akurgal¹⁶⁾ はアリストテレスの記述等から、ここで行われた種々の理学療法は今日でも実用されており、そのうち最も重要なものとして、水浴、温浴、泥浴、マッサージ、医療用薬草、軟膏塗布、聖水の飲用、飲食ダイエット・クール、結腸洗浄、寒冷な天候下での素足のランニング等が処方され、また自己暗示や夢見も治療では重要な役割を果たしており、どのような治療を施すかは患者の夢見によって決められたと指摘している。そのためにエピダウロスの「アバトン」同様、「夢見の部屋（お籠り室）」（エンコイメーターリオン、enkoimētērion）¹⁷⁾ ²⁷²⁸が特別に造られた。病いを患った巡礼者が最初の夜をこのお籠り室で過ごし、翌日医師団Asklepiadesが夢見の内容を聞いて治療カルテ

を作成し、物理療法や運動療法などを組み合わせて、治療棟や聖域内の諸施設で治療に当たったのだろう。

境内には入浴用、飲用のための井戸や浴槽・プールなどが点在していた。例えば治療棟へ通じる地下通路入口西側にあった屋根付きの泉屋②はヘレニズム期に建てられ



図20 ③の階段付き沐浴施設

たものであるが、浴用・飲用の流水を供給していた「聖なる泉」からの湧水は安全な飲用水とされ、ライオン頭部型の噴出し口からプールに流れ込んでいた。またその流水の音は地下通路に響き、治療に向う患者にリラクゼーションの効果があったとされる。また北列柱廊付近の、岩の割れ目より湧き出す聖泉④から聖水を引いたプール③は、浴用・飲用目的でローマ期に造られたが、水に放射性成分が含まれていたことから、その水は治癒効果があるとされ、患者は浴室内でその水を浴びて治療した。発掘者によって「岩の泉」と呼ばれている小さなプール⑤は、西側列柱廊の中央部近くの岩を彫り込んで作られた屋根付きプールで、それを支えた4つの柱跡が岩に掘られている。プールの石はすり減っており、かなりの頻度で使用されていたことから、アリストティデスが言及している泥浴治療が行われていたとされている¹⁸⁾。

(9) 聖なる地下通路

アスクレピエイオンは宗教施設であると同時に医療施設としての機能も持っているが、ここには他の遺跡には見られない興味深い設備として、「聖なる泉の貯水槽」②から治療棟⑨へと聖域を斜めに結ぶ全長80mの地下通路⑥が挙げられる。この通路は長い年月の間地中に埋もれていたのでほとんど損傷を受けておらず、天井はかまぼこ型になっており、採光と換気のために12個の明かり穴が規則的に並んで



図21 聖なる地下通路

いる。「聖なる泉の貯水槽」で体を洗ったり、水浴や泥浴をした患者が治療棟に行くまで体を冷やさないように、また暑い夏には体を冷やすために利用されたと考えられる。またこの地下道の床には水路が作られ、水が流れる仕組みになっていたが、これは地下道を患者が通る時、水の音でリラックスするように意図されたとか、あるいは神秘的な水の音で患者の治療が行われたとか、治療棟まで風雨の影響を受けないようにするためだったとか、解釈は多様である¹⁹⁾。

(10) アスクレピオス神殿

アスクレピオスは、元々は特定の土地と関係する世俗的な神であった。瞬時に場所を移動するオリュポスの神々とは対照的に、彼はほぼ恒常的にアスクレピエイオンに留まっていた。アスクレピオス像



図22 アスクレピオス神殿近辺

が神殿内に安置されていたが、崇拝は聖域内にあった祭壇で行われ、神殿の設備は増大する信者数に応じて拡充していった。列柱廊に囲まれた聖域の中庭北西側にヘレニズム期に建設され、ローマ期も引き続き使用された神殿やお籠り室が併置して建っていた。最も重要な「救世者アスクレピオス Asklepios Soter 神殿」²⁶⁾のほか、ヒュギエイア Hygieia、テレスフォロス Telesphoros、アポロ・カリテクノス Apollo Kaliteknos の3柱の神のうちの何れか2柱の神の神殿²⁴⁾²⁵⁾、複合お籠り室²⁷⁾²⁸⁾などが挙げられる。

貨幣に描かれた古代の建築物について叙述しているドナルドソンの著作に注目した G.D.ハート²⁰⁾ は、当時の鑄造貨幣にはその痕跡を残さずに消滅した古代の多くの建造物が描かれているが、ペルガモンの鑄造貨幣に描かれている多くの神々の神殿のなかでもアスクレピオスの神殿が一番際立っていたと指摘し、これら貨幣の描写は、遠方の人々にもペルガモンのアスクレピオスの聖域の素晴らしさが想像できる古代の旅行ポスターか絵葉書と同じような機能を果たしており、また鑄造貨幣は病気が治った人々のお護りとして利用されたとし



図23 ペルガモン出土鑄造貨幣のデザイン（出典：G.D.Hart,p.66）

ている。ここで鑄造貨幣が古代の巡礼・旅行の広告の役割を果たしていたとする彼の解釈は興味深い。

例えば、図23-(a)ペルガモン出土のコンモドス帝Commodus（在位AD180－192）の鑄造貨幣は、その主神殿が3本ずつ計6本のドーリア式柱で支えられた破風の正面をもつ6柱式で描かれ、その中心には右手に蛇が絡まっている杖をもったアスクレピオスの巨大な崇拜像が立っている。

(b)ペルガモン出土のカラカラ帝（Caracalla, AD214）の鑄造貨幣には3つの神殿が描かれ、そのうち中央上部には蛇が絡んだ杖を持って玉座に座った姿のアスクレピオス像が安置されている4柱式神殿が、下部には向き合うように2つの5柱式神殿が並んで建っている。アスクレピオスの聖域中庭の②4～②6の神殿群を描いているのだろうか。

(c)ペルガモン出土の貨幣（AD214）では、4柱式神殿にアスクレピオス像が座して安置されており、その前庭ではカラカラ帝が立っており、屈んでいる若者が犠牲獣の瘤のある牛背を背後から一撃を与える場面が描かれている。

(d)のコンモドス帝の鑄造貨幣は、テレスフォロスに捧げられた2柱式神殿を描いている。

ハーツ²¹⁾は、(b)と(c)は214年にカラカラ帝のペルガモン行幸を記念して鑄造された貨幣であり、上首尾に行われた処置に対してアスクレピオス神への感謝と恩寵を求めて鑄造されたものであるとしている。注目されることは、現在その基礎部分が円形建造物として残存しており、また復元図にもそのように描か

れているアスクレピオスの神殿やテレスフォレイオン（Rotunda, 治療棟）が矩形神殿として刻印されていることから、これらの貨幣が鑄造された214年以後に円形建造物が建てられたか、あるいは円形建造物との考古学の証拠から、不正確な貨幣の記録と解釈している。しかしAD 2世紀に円形建造物のゼウス・アスクレピオス神殿が新築されても、ヘレニズム期からの四柱神殿であったアスクレピオス・ソーテール旧神殿は依然として聖域内で最も由緒ある重要な神殿であったとしたなら、ペルガモンのアスクレピエイオンを象徴する建造物として鑄造貨幣のデザインに描かれたとしても不思議ではないと思われる。むしろ聖域西側の旧アスクレピエイオン構内の神殿群は2世紀に東側に新施設が建設された後も宗教崇拜儀式や治療活動で重要な役割を果たし続けたと考えられる。

お わ り に

医神アスクレピオスの聖地エピダウロスから分祠されたペルガモンのアスクレピエイオンは、創設された4世紀BCから閉鎖されるAD 4世紀までの間、小アジア近隣諸国だけでなく、ローマ帝国領内各地から参詣する病いを抱えた巡礼者たちの治療祭儀の聖地として発展し、またローマ皇帝から下層民まで雑多な階層の人々が蝟集し、いわば国際医療センターの様相を呈した。ローマ皇帝ハドリアヌスやアントニウス・ピウス帝をはじめ地方の有力者らは拳って聖域の改修・美化・拡大を行い、権力誇示・強化に結び付けていった。考古学の発掘成果によって描かれるAD 2世紀のアスクレピエイオンの遺構を概観してきたが、その繁栄の様子は認識できたと思う。

30才の時に原因不明の重病に罹り、治療のために13年間ペルガモンのアスクレピエイオンに滞在したアリストイデスAristidesは、そこで行われた医療法や物理療法（マッサージや水浴、泥浴など）や薬草治療、水の音を活用しての音楽療法さらに図書館、劇場等での精神的リフレッシュによる心的治療などについて詳述したが、それが現在、ペルガモンのアスクレピエイオンについての貴

重なる資料となっている。次稿では彼の著書などの文献及び出土碑文などを利用してしながら、ペルガモンのアスクレピエイオンで行われていた宗教崇拝儀式と治療祭儀について考えたい。

注

- 1) 拙著、「古代ギリシアのエピダウロス巡礼—アスクレピオスの治療祭儀—」『四国遍路と世界の巡礼 平成16年度愛媛大学国際シンポジウム プロシーディングズ』2005年、18—25頁
- 2) Paus., II .26.8 : Gerald D Hart, *Asclepius the God of Medicine*, the ROYAL SOCIETY OF MEDICINE PRESS, 2000, p.64 ; Alexia Petsalis-diomidis, *Truly Beyond Wonders:Aelius Aristides and the Cult of Asklepios*, Oxford UP, 2010, pp.161ff.; Turgay Tuna, エルデム 緑訳、『ペルガマ』,MERT, 2004.83—85頁
- 3) 馬場恵二、『癒しの民間信仰 ギリシアの古代と現代』東洋書林、2006年360—369頁
- 4) Petsalis-diomidis, *op.cit.*, p.161.
- 5) 「治療神・アスクレピオスと蛇」（ <http://www3.ocn.ne.jp/~tohara/toruko-asklepios.html> ）；「キリキア人が拝したダイモーン（アスクレピオス）に関して、知者を装ったいかさま師は悪質で、何万というものが、救い主や治療者に従うかのように、彼に付き従ったのです。彼が眠っている者に顕現し、また肉体を病んでいる者を癒すことがあったからです。もっともこの者は魂の破壊者で、いかさまにすぐに飛びつく者を真の救い主から引き離し、神なき迷妄へと導いておりました。そこで皇帝は適切な処置を取られました。彼は、妬み深い神、真の救い主に守られておられたので、この聖所の基底部まで破壊せよ、と命じられたのです（Euseb.,*Vit.Const.*,Ⅲ, 56）」（エウセビオス、秦剛平訳、『コンスタンティウスの生涯』京都大学学術出版会、2004年230—231頁）。ここではキリキアのアイガイのアスクレピエイオンの破壊について記述しているが、恐らくペルガモンのアスクレピエイオンも同様に破壊されたものと考えられる。癒しの神としてのアスクレピオス信仰が盛んだった地域が、『聖書』に記されているイエスの奇跡に象徴されるような、より強力な治療神として登場したキリスト教との葛藤のなかで、コンスタンティヌスの勅令により古代ギリシア・ローマの神々を崇拝した聖域が破壊され、癒しの神としてのイエスが帝国に受け入れられたのである。
- 6) Ekrem Akurgal, *Ancient Civilizations and Ruins of Turkey*, NET TURISTIL YAYINLAR SAN. TIC.A.Ş., 2007¹⁰, pp.105—111. ; Alexia Petsalis-diomidis, *op.cit.*, pp.167—220.

- 7) Petsalis-Diomidis, *ibid.*, p.179 :銘文は “ΚΛ.ΧΑΡΑΞ ΤΟ ΠΡΟΠΥΤΟ [N]” (Claudius Charax [built] the propylon) と省略形で、非常に簡潔なものであった。またCharaxはアントニウス・ピウス帝治世下AD147年にコンスルとなり、その後元老院議員となり、ローマからペルガモンに大使として派遣された。一方でギリシア史家として40巻に及ぶ『ヘレニカ』を著した (*The Oxford Classical Dictionary*, Oxford, 1996³, “Claudius Charax, Aulis”の項参照)。
- 8) *ibid.*, p.211. : FIG.60 ハドリアヌス帝の台座 (高さ54cm、幅108.5cm、奥行き91cm) には “ΘΕΟΝ ΑΔΡΙΑΝΟΝ ΦΛ ΜΕΛΙΤΗ” と刻文されている。
- 9) *ibid.*, p.214.
- 10) TEVHĪT KEKEÇ (テブヒット・ケケチ), *PERGAMON (ENGLISH)*, Hitit Color, pp.81~82.
- 11) Petsalils-Diomidis, *op.cit.*, p.196.
- 12) *ibid.*, p.187.
- 13) Akurgal, *op.cit.*, p.109
- 14) Petsalils-Diomidis, *op.cit.*, pp.192~193.
- 15) *ibid.*, p.205.
- 16) Akurgal, *op.cit.*, p.107.
- 17) 馬場恵二、前掲書、386頁は、平癒嘆願者がお籠りするお籠り堂は多くの場合、「立ち入り禁止の場所」を意味する「アバトン」の名で呼ばれるが、ペルガモンの「聖法」では「就寝所」を意味する「エンコイメテリオン」(ἐνκοιμητήριον) と呼ばれ、しかも碑文から「大」と「小」、別々のお籠り堂があったことを指摘している。
- 18) Akurgal, *op.cit.*, p.109~110.
- 19) *ibid.*, p.110.; Petsalils-Diomidis, *op.cit.*, p.188~89. ; TEVHĪT KEKEÇ, *op.cit.*, p.87.; Turgay Tuna, pp.90~91.
- 20) Hart, *op.cit.*, pp.64ff.
- 21) *ibid.*, p.65~66.